

なぜあの里山コミュニティは人々を惹きつけるのか？

— 「倉沢里山を愛する会」にみる事務局の工夫と参加者のポジティブ感情に着目して —

明星大学 経営学部 教授

大森 寛文

要約

本稿では、高齢化の進展や労力負荷の高さから担い手不足に直面している里山保全団体が多い中、倉沢里山を愛する会が人々を惹きつけている要因を解明し、そこから導出される示唆について考察した。同会の会報誌に対する計量テキスト分析とロジスティック回帰分析により、事務局による参加促進の工夫と、参加者のポジティブ感情に影響を与える要因を探った。その結果、事務局が活動回数の平準化や時間抑制など労力負荷を軽減するような工夫をしつつ、活動参加者の2つの参加動機（社会貢献動機、自己実現動機）を満たすような対応をとっていることを明らかにした。また、参加者は事務局や他の参加者からの声かけや指導を受けつつ、自身の学びや気づきを得るという相互作用を生み、それが長期にわたり高い割合でポジティブな感情を想起させていることを示した。さらに、今後は事務局の負荷を低減させる体制のあり方や、事務局の2つの動機を満たす方策のあり方についても検討を深める必要性が示唆された。

キーワード

コミュニティ、参加動機、ポジティブ感情、計量テキスト分析、ロジスティック回帰分析

1. 背景と目的

近年、環境問題への関心の高まりから、全国で里山の保全活動（草刈り、樹木整理、落ち葉整理、動植物保護等）が行われている。里山は「集落を取り巻く農地、ため池、二次林と人工林、草原などで構成される地域」と定義される（環境省,2010）。里山は国土面積の39.6%を占め、三大都市圏および都市近郊には里山全体の29.1%が集中している（環境省,2001）。全国の保全団体数は、2000年度の581団体から2018年度には3,303団体へと増えている（林野庁,2020）。一方、参加者が集まらないことや高齢化していることから担い手不足、管理不足という問題に直面している（森づくりフォーラム,2019）。

このような状況下、多くの人々を惹きつけている里山コミュニティ（倉沢里山を愛する会：東京都日野市）がある。同会は、地域の環境保全と市民のコミュニケーションの活性化を目指し、2000年4月に活動を始めた。活動フィールドは、雑木林、竹林、農園が一体となった里山（約4ha）であ

る。当初は数名で下草刈りや落葉掃きのボランティア活動から始めたが、徐々に参加者が増加する中で2001年5月に任意団体化した。注目すべきは、活動を開始した2000年から2022年までに、会員数が70人から220人へ、年間活動回数が5回から45回へ、年間活動参加者数が205人から1,153人へと拡大させてきたことである。さらに注目できるのは、2000年から定期刊行してきた『倉沢里山を愛する会会報』（合計104号、924記事）である。これは、詳細な活動記録、体験記、会員・外部者のエッセイ、里山の生物・文化の解説、事務局からのお知らせ等のコンテンツから成る。参加者の体験内容や喜怒哀楽を含めた生々しい情報が記録されていることから、人々を惹きつける要因を解明するための好適なデータとなりうる。そこで、本稿では、倉沢里山を愛する会が発行する会報誌の計量テキスト分析とロジスティック回帰分析を通じて、同会が人々を惹きつける要因について解明し、そこから導出される示唆について考察することを目的とする。

II. 先行研究レビューと リサーチ・クエスチョンの設定

1. コミュニティ活動参加の促進・阻害要因に関する先行研究

里山保全活動への参加動機には、①自己実現動機（仲間との交流、気晴らし・楽しみ等）と、②社会貢献動機（良好空間形成、環境保護等）の2つがある（奥・田原,2012）。一方、参加者の高齢化や労力負担が動機維持の阻害要因となっている（唐崎・安中・木下,2009）。松村・橋本(2020)によれば、里山保全の行動意図には、①便益・費用効果と②社会規範評価が直接的に影響を与え、③対処有効性認知と④環境リスク認知が間接的に影響を与える。このため参加者を増やすために個人的・社会的便益を具体化し、労力負担の軽減策を検討することが必要と説く。これらの点に関して、企業主催型の二輪車のブランド・コミュニティ研究（宮澤,2014）の知見が示唆を与える。ひとつは、メンバーが重視する2つの参加動機への適切な対応である。すなわち、「他者とのコミュニケーション」動機に対して各種懇親会やツーリングイベント開催していること、「自己便益向上」動機に対して新商品等の一早い情報提供や運転技術の指導等を行っていることである。もうひとつは、会員に自発的行動を促すことを目的にスタッフが意識的に声かけを行っていることである。

また、今井・野波・高村（2016）は、①活動経験者の方が未経験者よりも里山の価値評価が有意に高く、②農家と非農家では保全活動の行動意図に影響する価値が異なることから、活動参加者の属性の違いによる評価の差異を考慮する必要があると論じる。

2. マーケティング分野における経験や感情に関する先行研究

近年、マーケティング研究では顧客の経験や感情が注目されつつある。価値提供から価値共創へとというマーケティングの発想転換の下で、価値創造の源泉が顧客の経験にあると認識されるようになり、顧客の内面へと関心を向ける必要性を高めているからである（Vargo & Lusch, 2004）。そして、顧客の経験は組織や他の関係者との相互

作用の中で共創され（Jain, Aagja & Bagdare, 2017）、その質が機能的価値にとって替わる価値を創出し（Pine & Gilmore, 1999 ; Schmitt, 1999）、そこに感情が埋め込まれる（Kuuru, Litovuo, Aarikka-Stenroos & Helander, 2020）。

また、顧客が生成した多様なテキストをポジティブ、ネガティブの感情ラベルに分類し、そこに内在するインサイトを導出する試みがある。感情測定手法には、①コーダー型（複数人による文書読み込みと分類・集計）、②標準辞書ベース型（心理学の知見に基づく辞書で抽出・集計）、③拡張辞書ベース型（目的に応じて作成した辞書で抽出・集計）、④機械学習ベース型（学習したアルゴリズムで分類）などがある（佐藤, 2022）。ただし、感情には複数の概念（emotion, affect, mood等）が混在し、統一されていない（岸, 2012 ; 三井, 2015）。

3. 作業仮説とリサーチ・クエスチョンの設定

先行研究より、次の作業仮説を立てることができる。すなわち、倉沢里山を愛する会では、事務局が保全活動の労力負担を軽減するような工夫をしつつ、活動参加者の2つの参加動機を満たすような対応をとっている。他方、参加者は事務局や他の参加者からの声かけや指導を受けつつ、自身の学びや気づきを得るという相互作用を生み、それがポジティブな感情を想起させる。そこで、これを検証するリサーチ・クエスチョンを設定する。

RQ1: 事務局は、活動の労力負担を軽減するために、どのような工夫をしているのか？

RQ2: 事務局は、活動参加者の2つの動機（自己実現動機、社会貢献動機）を満たすために、どのような工夫をしているのか？

RQ3: 活動参加者には、どの程度のポジティブ感情が想起されているのか？

RQ4: 活動参加者が抱くポジティブ感情には、どのような要因が影響を与えているのか？ そこに参加者の属性による差異はあるのか？

III. 分析方法

1. 分析方法Ⅰ：事務局による参加促進に向けた工夫

(1) データセット作成

同会の活動内容について、①通し番号、②実施年、③実施月、④活動内容、⑤参加者数の5項目のデータセットを作成する。情報源は、会報誌掲載の公式活動記録（2000年～2022年の393回分）である。

(2) 計量テキスト分析

労力負荷への対応状況を確認するために、活動件数を実施年・月でクロス集計し、開催頻度の分布状況と時系列変化をみる（RQ1に対応）。また、活動参加者の2つの参加動機への対応状況を確認するために、活動内容を「①飲食・交歓」、「②緑地保全」、「③研修・交流会」に3つに類型化し、その開催回数の時系列変化をみる（RQ2に対応）。「①飲食・交歓」は自己実現動機に、「②緑地保全」は社会貢献動機に、「③研修・交流会」は両動機に関連した活動と考えられる。そこで、次のようなコーディングルールを設定して計量テキスト分析を行う。「①飲食・交歓」は、各回で提供される具体的な飲食物名を抽出する。「②緑地保全」は、草刈り、植物保護、樹木整理、落ち枝・落ち葉整理、堆肥づくり、粗朶柵整備、施設・設備・道路整理、農園作業にカテゴリー化する。「③研修・交流会」は、各種講習会・勉強会などの研修と、散策会・収穫祭などの交流会に関連する単語とする。分析ソフトはKH Coder (3.Beta.07d) を用いる。

2. 分析方法Ⅱ：参加者のポジティブ感情に影響を与える要因

(1) 計量テキスト分析用データセット作成

会報誌より、①記事番号、②発行年、③号数、④記事タイトル、⑤記事タイプ、⑥著者名、⑦参加者タイプ、⑧著者の性別、⑨記事内容の9項目のデータセットを作成する。なお、これら9項目のいずれかに欠損値のあるものを除いた562記事を対象とする。

(2) 経験と感情を抽出する枠組み設定と計量テキスト分析

「感情」は、「事務局等からの働きかけ」と「参加者の反応」の連鎖の結果として想起されるものと捉える。本稿

では、感情円環モデル（Russel & Barrett,1979）を援用し、ポジティブ感情（①驚き、②興奮、③元気・喜び、④幸せ、⑤満足、⑥晴朗、⑦寛ぎ、⑧落ち着いた、の8カテゴリーに準ずる単語）、ネガティブ感情（①緊張、②神経質、③重圧、④心配、⑤悲しみ、⑥憂うつ、⑦無気力、⑧疲れ、の8カテゴリーに準ずる単語）に区分するコーディングルールを設定する。これを辞書とした計量テキスト分析を行い、ポジティブ感情を含む記事の割合の出現状況の時系列推移をみる（RQ3に対応）。

「事務局からの働きかけ」に関しては、記事内容の中に特定の事務局員や会員から声掛けや指導等を得た旨の記述が多くみられることに着目し、氏名と「指導、アドバイス、助言、案内、説明」等の単語を組合せた辞書を構築する。「参加者の反応」に関して、学びや気づきがあったという記述が多いことから、「学び、勉強、発見、みつける、感じとる」等の単語をコーディングする。これらを辞書として計量テキスト分析を行い、その結果は以下のロジスティック回帰分析の変数として用いる。

(3) ロジスティック回帰分析によるポジティブ感情に影響を与える要因分析

ポジティブ感情に影響を与える要因を解明するために、ロジスティック回帰分析を行う（RQ4に対応）。目的変数を「ポジティブ感情の有無」とし、「事務局等からの働きかけの有無」、「学び・気づきの有無」、「当該年の全活動件数」、「参加者のタイプ（事務局、その他）」、「性別（男、女）」の5つを説明変数としたモデルを設定する。このモデルの意図は、目的変数に対して、相互作用の質（事務局等からの働きかけの有無、学び・気づきの有無）と量（当該年の全活動件数）のほかに属性差異（参加者のタイプ、性別）が与える影響を把握することにある。これら6項目を562件の記事単位で整理したデータセットを作成し、ロジスティック回帰分析を行う。分析ソフトは、R (version4.2.1) を用いる。

IV. 分析結果

1. 分析結果Ⅰ：事務局による参加促進に向けた工夫

(1) 労力負荷への対応状況

活動の月別開催回数の時系列推移を示した（表-1）。年間の合計件数をみると、2000年の5回から2022年の45回と増加している。しかし、これを月別にみると、2018年までは概ね2回以内としている。ただし、2009年には用地を拡張したため、開催回数が一時的に増加した（3月3回、6月4回）。また、2020年以降は、コロナ禍で少人数による多数回の作業を余儀なくされ、月別開催回数が3～6回程度へと増加した。これらを除くと、事務局は活動回数の平準化を図っている。また、事務局へのヒアリングによれば、1回あたりの作業時間も午前中の2時間程度に抑えるなど意識的に労力負荷の軽減を図っている。

(2) 活動参加者の2つの参加動機への対応状況

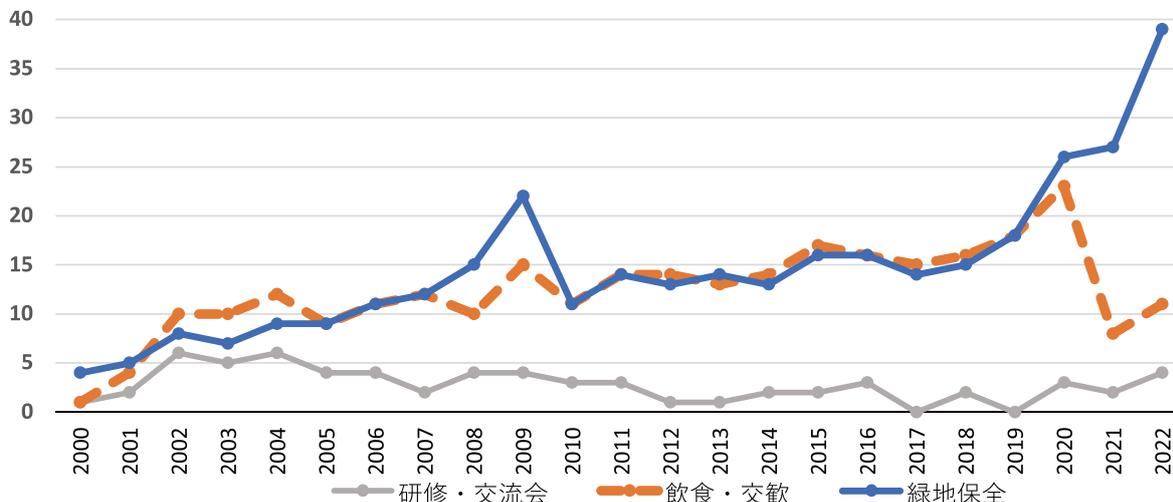
3類型化した活動の開催回数について時系列推移を示した（図-1）。「研修・交流会」は、3つの活動のうち最も開催数が少なく、平均して年間で3回未満である。「緑地

保全」と「飲食・交歓」は、ともに2000年の数件から2020年の25件程度へほぼ同水準で増加傾向を示した。一方、2021年以降は双方の動きが相反し、「緑地保全」の回数が増加したのに対し、「飲食・交歓」は減少した。これは、コロナ禍により、飲食を伴う交歓会の開催ができなくなったからである。コロナ直前までは、毎回ではないものの、「緑地保全」とその終了後における「飲食・交歓」の機会を組合せてきた。その理由は、緑地保全という辛い作業だけでは人が集まらないからである。実際、「飲食・交歓」を伴う場合と伴わない場合の平均参加者数を算出すると、前者の44.5人に対し、後者は23.2人と2倍程度の差異が生じている。すなわち、「緑地保全」という「社会貢献動機（良好空間形成、環境保護等）」と「飲食・交歓」という「自己実現動機（仲間との交流、楽しみ等）」とを均衡させる工夫をしている。

表-1 活動の月別開催回数の時系列推移

年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
2000	0	0	0	0	1	1	1	0	1	0	0	1	5
2001	0	1	0	0	1	1	1	0	1	1	0	1	7
2002	1	2	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	12
2003	2	1	2	1	1	1	1	0	2	1	1	1	14
2004	1	1	1	1	1	1	1	0	2	1	2	1	13
2005	0	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	10
2006	1	1	1	1	1	1	2	1	1	2	1	1	14
2007	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	13
2008	2	2	2	1	1	1	2	0	1	1	2	2	17
2009	2	2	3	2	1	4	2	2	1	2	2	2	25
2010	2	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	13
2011	2	2	0	1	1	1	1	1	1	1	2	2	15
2012	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	15
2013	1	2	0	1	2	2	1	1	1	1	2	1	15
2014	2	0	1	2	2	2	1	1	1	1	2	1	16
2015	2	2	1	1	2	2	1	1	1	1	2	1	17
2016	1	2	1	1	2	1	2	1	1	1	2	1	16
2017	2	2	0	1	2	2	1	1	1	0	2	1	15
2018	2	1	1	1	2	2	1	1	1	1	2	1	16
2019	3	2	2	1	2	2	1	1	1	1	2	1	19
2020	2	4	3	0	0	2	1	4	2	2	6	3	29
2021	1	1	2	3	5	4	3	2	3	2	4	2	32
2022	5	4	5	3	4	3	5	3	3	4	5	1	45
平均	1.6	1.6	1.3	1.1	1.6	1.7	1.4	1.0	1.3	1.2	2.0	1.4	-

図-1 活動3類型別にみた開催回数の時系列推移



2. 分析結果2：参加者のポジティブ感情に影響を与える要因

(1) コミュニティ活動を通じて想起されている感情

ポジティブ感情またはネガティブ感情を含む記事の割合の出現状況について時系列推移を示した(図-2)。両感情は上下変動をしているが、常にポジティブ感情の方がネガティブ感情を上回って推移している。ポジティブ感情の出現割合は2000～2022年で平均74%、ネガティブ感情は18%と大きな差異がある。ポジティブ感情を構成する要素のうち、元気・喜び(楽しい, 嬉しい等), 興奮(感動, 感激等), 幸せ(幸せ, しあわせ)に関する単語が多く, 活動を楽しんでいる様子が伺える。一方, ネガティブ感情では, 心配(心配, 不安, 懸念等)が多い。例えば, 初心者が保全作業をうまくできるのかを心配するものなどがある。

(2) ロジスティック回帰分析によるポジティブ感情に影響を与える要因

分析に用いる変数の記述統計量を表-2に, ポジティブ感情の有無を目的変数としたロジスティック回帰分析の結果を表-3に示した。なお, 説明変数のVIFを算出した結果(事務局等からの働きかけの有無:1.016, 学び・気づきの有無:1.026, 当該年の全活動件数:1.014, 参加者のタイプ:1.030, 性別:1.018), 多重共線性は発生していない。

分析の結果, ポジティブ感情の有無に影響を与えている要因は, 有意水準5%で検定すると「事務局等からの働きかけの有無」, 「学び・気づきの有無」, 「参加者のタイプ」, 「性別」の4つとなる。オッズ比が高い順に「事務局等からの働きかけの有無(2.538)」と「参加者のタイプ(2.236)」とあるが, これらは事務局以外の活動参加者(会員や外部者)にとって, 知識・経験豊富な事務局や会員から里山を案内されたり, 緑地保全の技術やノウハウの指導・アドバイスを受けたりすることがポジティブ感情(喜びや感動)につながっていることを示している。また, 「性別」のオッズ比(1.759)から, 女性の方が男性よりもポジティブ感情を想起しやすい状況を示している。さらに, 「学び・気づきの有無(1.587)」は, 事務局等とのやりとりの中で, 参加者が学びや気づきを得たという好反応を示したことを意味する。総じて, 活動参加者の間で優れた相互作用が生じ, それがポジティブ感情に影響を与えていることを示している。

なぜあの里山コミュニティは人々を惹きつけるのか？ — 「倉沢里山を愛する会」にみる事務局の工夫と参加者のポジティブ感情に着目して —

図-2 ポジティブ感情またはネガティブ感情を含む記事の割合の出現状況の時系列推移

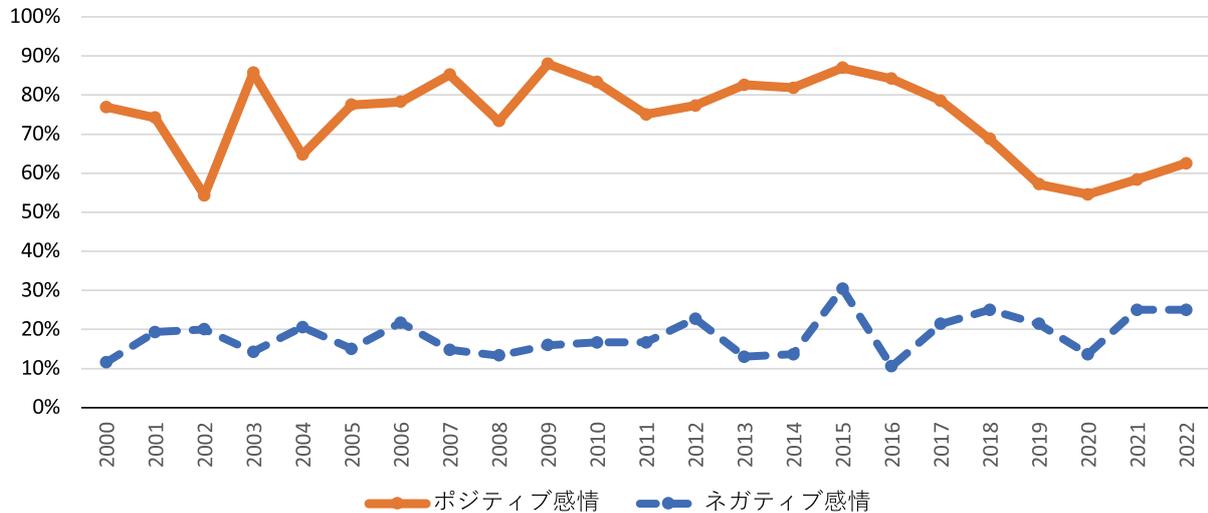


表-2 分析に用いる変数の記述統計

変数	サンプル数	平均	標準偏差	最小値	最大値
ポジティブ感情の有無 (0=なし, 1=あり)	562	0.74	0.440	0	1
事務局等からの働きかけの有無 (0=なし, 1=あり)	562	0.20	0.400	0	1
学び・気づきの有無 (0=なし, 1=あり)	562	0.44	0.500	0	1
当該年の全活動件数	562	16.77	9.040	5	44
参加者のタイプ (0=事務局, 1=その他)	562	0.65	0.480	0	1
性別 (0=男, 1=女)	562	0.49	0.500	0	1

表-3 ポジティブ感情の有無を目的変数としたロジスティック回帰分析の結果

	偏回帰係数 (β)	標準誤差	zvalue	有意確率	オッズ比	95% 信頼区間	
	EXP (β)				下限	上限	
切片	0.356	0.271	1.315	0.189	1.428	0.838	2.429
事務局等からの働きかけの有無 (0=なし, 1=あり)	0.931	0.321	2.905	0.004**	2.538	1.396	4.954
学び・気づきの有無 (0=なし, 1=あり)	0.462	0.214	2.159	0.031*	1.587	1.047	2.427
当該年の全活動件数	-0.021	0.011	-1.949	0.051	0.979	0.959	1.000
参加者のタイプ (0=事務局, 1=その他)	0.805	0.207	3.880	0.000***	2.236	1.490	3.362
性別 (0=男, 1=女)	0.565	0.207	2.723	0.006**	1.759	1.175	2.652

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

AIC : 600.383, Cox-Snell R-sq. : 0.087 , Nagelkerke R-sq. : 0.128, N : 562

V. 総括と考察

1. 総括：リサーチ・クエスチョンと回答

分析結果より以下の4点が明らかになった。第1に、里山コミュニティ事務局は、活動の開催回数を月当たり2回、1回2時間程度に抑えることで労力負荷を軽減している（RQ1の回答）。第2に、里山コミュニティ事務局は、意識的に保全活動と飲食・交歓を組合せることで、社会貢献動機（良好空間形成、環境保護等）と自己実現動機（仲間との交流、楽しみ等）とを均衡させる工夫をしている（RQ2の回答）。第3に、23年間の長期にわたりポジティブ感情が一貫して高い比率で想起されている（RQ3の回答）。第4に、活動に参加した一般会員や外部者（特に女性）は、知識・経験の豊富な事務局や会員からの働きかけを通じて学びや気づきを得ながら優れた相互作用が働き、参加者のポジティブな感情に影響を与えている（RQ4の回答）。一方、2020年以降のコロナ禍においては、緑地保全と飲食・交歓の組合せができなくなり、少人数による多数回の活動を増やさざるを得なかったことが参加者の社会貢献動機と自己実現動機を均衡させる努力を阻害することにつながった。両動機の均衡が実現できないと、参加者が大幅に減少することも確認できた。

2. 里山コミュニティ運営の維持・発展に向けた示唆の考察

環境問題の深刻化に伴い、里山の保全活動を活発化させることが期待されている。そのためには、事務局が参加者の労力負荷を軽減するとともに、2つの参加動機（社会貢献動機、自己実現動機）を満たすための工夫をすることで参加しやすい仕組みを整備する必要がある。とりわけ2つの参加動機の均衡を意識した活動の組合せが参加者確保のために不可欠であることが確認できた。

一方、事務局の方が会員や外部者よりもポジティブ感情が想起するオッズが低いことも分かった。例えば、草刈りひとつとっても、対象場所の下見、希少植物の事前調査と保護を含めると計3回の作業が必要になるなど、公式記録には残らない事務局の隠された苦労が多々あるからと考えられる。それでは、なぜ事務局は活動し続けることができるの

だろうか。その理由は同会の設立背景にある。この里山は、地元4軒の地権者が相続対象地を公的緑地として存続させることを望んだ経緯から、日野市への寄付地と相続税納地を日野市が国から買い取った公有地である。また、市と同会との間で締結されたパートナーシップ協定の下、市が里山の維持管理の責任とボランティア活動の支援を行い、同会が維持管理の運用責任を持つという役割分担を行っている。事務局の中心人物は元地権者であり、里山に対して強い愛着を抱いていることが行動意図に影響を与えている可能性がある。換言すれば、強固な里山への愛着が、自身の社会貢献動機と自己実現動機とを表裏一体の関係として結びつける役割を果たしているものと考えられる。ここから示唆されることは2つある。ひとつは、土地所有者や事務局だけが責任を負い続けるのではなく、土地の所有と運用を分離し、官民の主体が連携・協力して責任を持つような体制あり方を検討することである。もうひとつは、活動に向けた2つの動機を生み出す可能性のある「場所愛着」に注目し、それを効果的に活用する方法について検討を深めることである。しかし、これらの点の詳細について本稿では検討できなかったため、今後の研究課題としたい。

謝辞

倉沢里山を愛する会の田村はる子会長と伊東晴雄副会長からデータの分析過程において貴重なコメントを頂戴しました。深く感謝致します。

引用文献

- 今井葉子・野波寛・高村典子（2016）.「コモンズの重層的価値が環境配慮行動に及ぼす影響—農家と非農家によるため池の農業価値と環境価値に対する評価」『保全生態学研究』21, 1-14.
- Jain,R., Aagja,J. & Bagdare, S. (2017). Customer experience – a review and research agenda, *Journal of Service Theory and Practice*,27(3),642-6.
- 環境省（2001）.『日本の里地里山の調査・分析について（中間報告）』
- 環境省（2010）.『里地里山保全活用行動計画～自然と共に生きるにぎわいの里づくり～（平成22年10月）』
- 唐崎卓也・安中誠司・木下勇（2009）.「農業・農村体験活動関係者の参加モチベーションとインセンティブ」『ランドスケープ研究』

72 (5), 835-84.

- 岸志津江 (2012). 「消費者行動研究における感情の位置づけ (1) —感情と認知の相互関係—」『東京経大会誌 (経営学)』 274,73-89.
- 倉沢里山を愛する会 『倉沢里山を愛する会会報 アリスの丘・風の丘ファーム NEWS LETTER』 第1号 (2000年5月28日発行) ~ 第104号 (2023年1月1日発行) (<https://www.alice-fm.info/news.htm>)
- Kuuru,TK.,Litovuo,L.,Aarikka-Stenroos,L. & Helander,N. (2020).Emotions in Customer Experience, In Lehtimäki,H.,Uusikylä,P.& Smedlund,A. (Eds.),*Society as an Interaction Space : A Systemic Approach* (pp.247-274), Springer.
- 松村見嗣・橋本禪 (2020). 「環境配慮行動の要因連関モデルを用いた都市近郊里地里山の保全活動の規定因分析」『ランドスケープ研究 (オンライン論文集)』 13, 1-7.
- 三井雄一 (2015). 「マーケティング・コミュニケーションにおける感情の役割」『マーケティングジャーナル』 35 (1), 164-176.
- 宮澤薫 (2014). 「消費者の自発的参加行動の促進に向けたブランド・コミュニティの活用」『千葉商大論叢』 51 (2), 137-155.
- 森づくりフォーラム (2019). 「森づくり活動についての実態調査 (平成30年調査集計結果)」
- 奥敬一・田原加代子 (2012). 「箕面国有林をとりまく森林ボランティア団体における活動動機の構造」『ランドスケープ研究』 75 (5), 525-528.
- Pine, B.J. and Gilmore, J. H. (1999). *The Experience Economy*, Harvard Business School Press.
- 林野庁 (2020). 『令和元年度 森林・林業白書』
- Russell,J.A. & Barrett,L.F.(1999). Core Affect, Prototypical Emotional Episodes, and Other Things Called Emotion:Dissecting the Elephant, *Journal of Personality and Social Psychology*, 76(5), 805-819.
- 佐藤圭 (2022). 「マーケティングにおけるテキストデータを用いた感情の測定手法に関するレビュー」『甲南経営研究』 63 (2), 29-48.
- Schmitt, B. H. (1999). *Experiential Marketing: How to Get Customers to Sense, Feel, Think, Act, and Relate to Your Company and Brands*, Free Press.
- Vargo, S. L., & Lusch, R. F.(2004). Evolving to a New Dominant Logic for Marketing, *Journal of Marketing*, 68(1),1-17.